

EGP としての本学の英語教育の出口調査  
Evaluating Our Course Design as EGP

竹村 雅史

北星学園大学短期大学部

Masashi Takemura Hokusei Gakuen University Junior College

This paper reports the results of an evaluation of our course design as conducted by the department in 2012. It is important that course design should be evaluated by not only the teachers but also the learners to improve it, especially in ESP (English for Specific Purposes). We attempted to collect questionnaire data relating to our course as EGP (English for General Purposes), from the viewpoint of the learners. The results showed that the learners highly evaluated our course as EGP overall and that they were satisfied with their acquisition of the four basic English skills.

### 1. 英国の大学満足度調査

HEFCE (Higher Education Funding Council for England) は 2005 年から英国の高等教育機関で教育を受けた最終学年の学部学生を対象に毎年全国学生満足度調査 (NSS: National Student Survey) を実施している。この結果は英国内の大学ランキングの評価要素の一つに考えられ、受験生の大学を選ぶ際の情報として公開されている。

質問のカテゴリーは「授業」「評価とフィードバック」「アカデミック支援」「編成とマネジメント」「学習設備・機材等」「個人の能力開発」「総合満足度調査」で合計 22 の質問項目数について満足度を 5 段階で尋ねている (注 1)。公表値は 5 の「満足」、4 の「概ね満足」を選択した合計数で順位付けがなされている。

英国では、このように英国内の大学間、あるいは同一学部間における項目での比較が容易になり、大学の授業やそのコースの質保障という意味でも、学生調査による改善は重要性を増してきている。

日本では学生が受けた授業に関する評価は、学期終了時に授業アンケート等により各大学個別に実施されているが、学部学科全体で実施しているコースの内容に関しては、あまり目にしない。本研究は、英国の大学満足度調査を参考に、卒業生による 5 段階の満足度の視点で、英語技能の習得や、コース全体の評価をしてもらい、実態を把握し、今後のカリキュラムやシラバス改善につなげて行こうというものである。

### 2. 本学の英語教育の背景

本学英文学科の英語教育 (コース) は、2 年間という限られた時間の中で「聴く・話す」「読む・書く」の基本的な能力を磨くことはもちろん、さらに「知る・使う」といった応用能力

もしっかり身につけることを目指している。

1年次は45分週4回の『オーラル・イングリッシュ I II』を始め『発音法 I II』『リスニング・スキル I II』『リーディング・スキル I II』『ボキャブラリー・ビルディング I II』等々、基本的な能力を磨くための必修科目を学び、2年次では、『日本語教授法』『ホスピタリティと観光』『ビジネス・イングリッシュ I II』といった専門性の高い選択科目と、8領域に渡る全て英語によって行われる『Geography I II』『Psychology I II』『Anthropology I II』『Sociology I II』といった EAP (English for Academic Purposes) に対応した選択必修科目が設定されている。これによってテキストや大量のプリントの英語を読みこなしたり、説明の要点をノートにとったり、質問への解答の仕方やレポートの書き方を学び、学生の英語運用能力の向上に繋げている。これらの授業で課せられる学生の課題をネイティブ・スピーカーによるチェックが受けられるライティング・ラボも常設され、年間延べ 750 名の学生が利用している。

入学生のニーズに沿ったカリキュラムを用意し、そのカリキュラムを学習者と授業者が共に十分に共有し、授業を通して如何に実践していくかに英語教育 (コース) の成否がかかっている。特に短期大学は2年というスパンの中で完結した英語教育の実践が求められている。

### 3. EGP としての本学の英語教育

本学では卒業後の就職先を絞り込んだディスコース・コミュニティを意識した英語教育のコースは設定されていない。卒業生の進路状況は (2012年5月) は、図1に示すように卒業生 136 人中就職決定者 70 名、進学者 42 名、その他 24 名となっている。就職者の内訳は図2の通り、1 番の卸・小売業の 28.6%、2 番目の金融・保険・証券業の 18.6%、3 番目の観光・興行・娯楽の 15.7%、4 番目の航空・運輸の 10.0% で合わせて 70% を超える。

本学の英語教育は学習者に焦点を当てた場合、「ある特定の目的をもって学習され使用される英語」、ESP (English for Specific English) ではなく、「学習者はいかなる分野における英語の使用にも対応できる英語力を身につける」EGP (English for General Purposes) だと言える。まさに、50% 以上の卒業生が図2の多岐にわたる職業に就くことから、EGP を意識したカリキュラム構成であり、同時に進学する者も 30% いることから全て英語による一般教養に関連した 8 科目、スタディ・スキル関連科目を設置し、EAP にも対応したカリキュラム構成になっている (注2)。

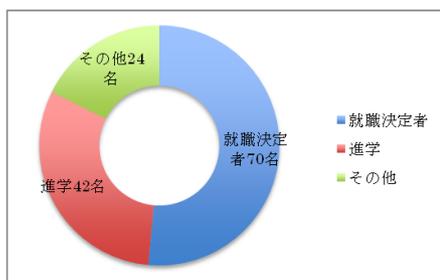


図1 卒業後の進路

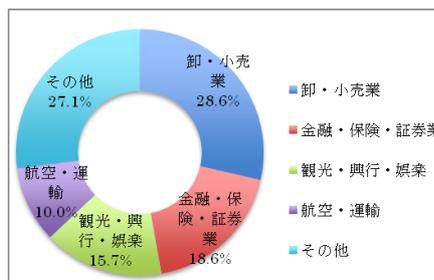


図2 卒業生の就職先

4. 学習者側のコース評価の重要性

ESP では、コース開始時に学習者のニーズに応えるためにニーズ分析をし、シラバス作成、教材作成、指導法、成績評価の順を追い、コース終了時に学習者、授業者、ディスコース・コミュニティの関係者を交えてのコース評価を行うのが一連のプロセスである。これに対して EGP ではシラバスは最初から決められており、学習者のニーズや教材の選択は授業者に負っている。また、授業アンケートなどの評価は行われるが、コース全体に関する調査が行われることは少ない。ESP であっても EGP であってもコース終了時の評価を行い、次年度以降に生かすことは重要である。

本学では、これまで学生からのコース評価（ここでは 2 年間の全般に関する満足度）を実施してこなかった。

5. 卒業生による 4 技能の習得評価と満足度

ここで取り上げるのは、2012 年度に卒業予定者を対象に実施した 4 技能の習得とコース全体に関するアンケート調査の結果の一部である。当初、卒業予定者全員が一同に集まる機会を伺い、回答してもらおう試みであったが、調査時期が成人式とも重なり回収率は 72% と低くなった。本来の授業を割いてのアンケート調査になるので、なるべく調査項目も簡潔にし、回答時間も学生の負担にならないような配慮をして実施した。

- 1) 回答対象：2012 年度卒業生（卒業予定者数 127 名中 92 名）
- 2) 調査時期：2012 年 1 月 17 日（火）
- 3) 質問紙 5 検法

1 「おおいいつた（満足）」 2 「つた（概ね満足）」 3 「変わらない（普通）」 4 「どちらかと言えばついていない（どちらかと言えば不満）」 5 「ついていない（不満）」

図 3 は「読む力」に対する回答の割合を示したものである。

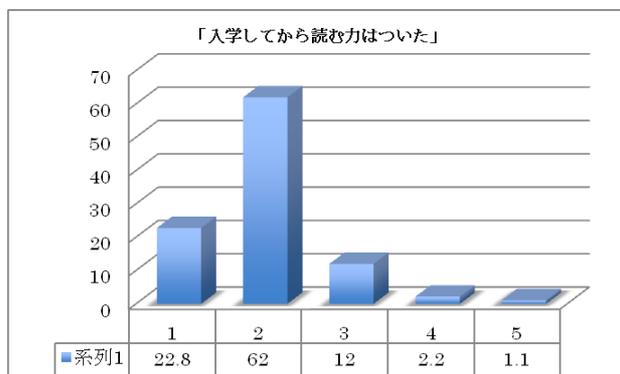


図 3 読む力に関して

読む力に関して「おおいいつた」、「つた」を合わせ 84.8% であるが、読む力が確実に

伸びたと感じた割合は、22.8%で学習者にとっては自信を持ってない結果となった。これは、おそらくカリキュラムの2年次にリーディングの授業科目が設定されていない、1年次の『リーディング I・II』（2単位）の必修科目で終了することが原因として考えられる。2年次のリーディング科目の新たな設定が急がれる。

図4は「聴く力」に対する回答の割合を示したものである。

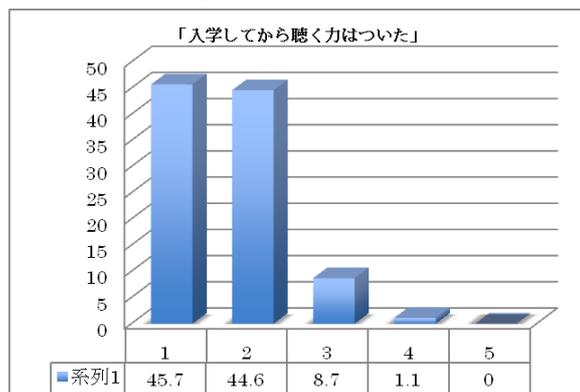


図4 聴く力に関して

この聴く力に関しては、「おおいについた」「ついた」共にほぼ同じ割合で、二つ合わせて90.3%であり、聴く力が4技能の中で一番自信がたった数字になっている。1年次で週4コマ、2年次で3コマの設定の『オーラル I II III IV』や『リスニング・スキル I II』等の聞く技能を高める授業が多く設定されていることが一因として考えられる。

図5は「話す力」に対する回答の割合を示したものである。

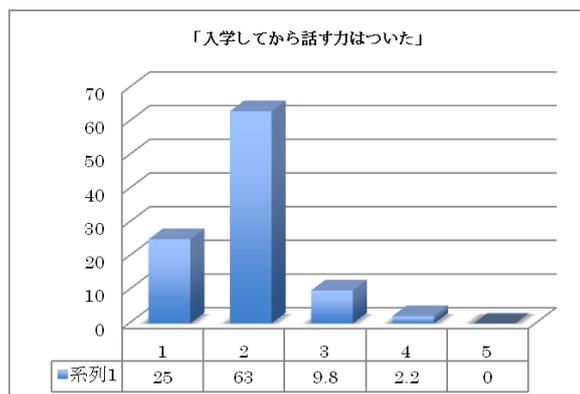


図5 話す力に関して

話す力に関しては、「おおいについた」「ついた」を合わせて88%であるが、「ついた」の割合が63%あり、実感はあるものの自信が持てるまでには至っていない感じがつかめる。これは、項目1の読む力と同じ傾向にある。これは、1年次の「オーラル・イングリッシュ

「英語 I II」が 8 単位の必修科目に対して、2 年次の「オーラル・イングリッシュ III IV」4 単位の選択必修科目のため、学年進行にともなう単位減少によるものと考えられる。また、どの程度話せるかについての認識は、個人の感覚や意識によるところが多く、その個人差が表れた結果とも言える。

図 6 は「書く力」に対する回答の割合を示したものである。

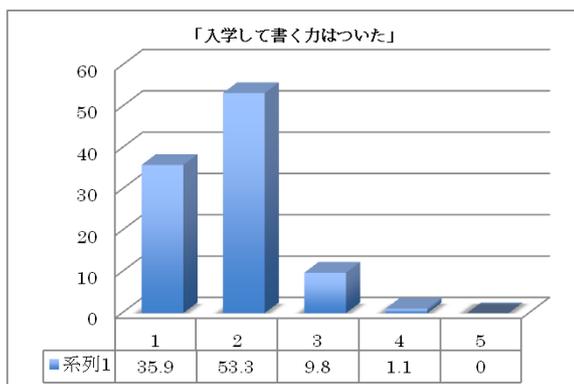


図 6 書く力に関して

書く力に関しては、「おおいに書いた」「書いた」を合わせて 89.2%であり、項目 2 の聞く力に次ぐ数字になった。1 年次設定科目に『英作文 I II』があるが、この授業は一定以上の量の英文を毎回決められた時間内に仕上げ、パソコンを通じて授業者に提出する形式で学習者が時間を要する科目である。書く力は 2 年次の全て英語による授業である「英語による一般科目」の課題提出（英語）をこなす上で基礎となるものである。2 年間を通じて書く技能は、これによって更に身についたと実感した学生は多いと思われる。

図 7 は「コース全体」に対する回答の割合を示したものである。

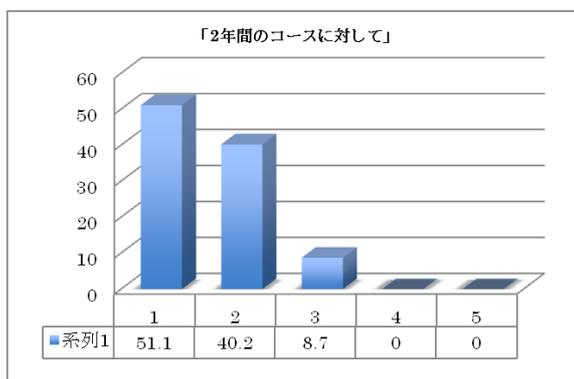


図 7 コース全体に関して

2 年間での短大全体の印象に「満足」「大いに満足」を合わせ 91.3%であった。短大の 2 年間で振り返って満足度を調べたものである。「満足」が「概ね満足」を約 10%上回った。

この項目にある「コース全体」は必ずしもカリキュラムを直接反映するものではないが、学習者が受けた2年間の教育全体として、捉えることも可能である。

## 6.まとめ

4 技能の習得を学習者側からの視点でみた結果、「おおいについた」「ついた」の各合計から高い順に「聴く」(90.3%)「書く」(89.2%)「話す」(88%)「読む」(84.4%)となった。「読む」に関しては85%で他の3技能に比べ、若干満足度が低くなったが、「聴く」、「話す」、「書く」各技能でその技能が「ついた」「概ねついた」を合わせ90%に近い割合であった。EGPとしての英語教育の根幹である4技能の習得に関して、学生はある程度自信を持って各技能が身についたと捉えている。ただ、技能が身についたとの確信が感じられる「おおいについた」の項目だけを見ると、「聴く」(45.7%)「書く」(35.9%)「話す」(25%)「読む」(22.8%)となり、その差は各技能間で大きい。総合評価としての満足度は「満足」(51.1%)「概ね満足」(40.2%)で合わせて90%を超える数字が出たので、コース全体は概ね学生に受け入れられたと思われる。

今回のアンケートは始めたばかりで、実態のおおよその概観しか捉えることができなかったが、今後各技能のより詳細な項目の精査や、英国大学満足度調査の質問カテゴリーの導入を含め、年度の継続的な実施が待たれる。また、学習者側ばかりでなく、授業者側からのアンケートも実施してカリキュラム全体の改善と各科目の有機的繋がり工夫が今後一層求められる。

## 参考文献

深山晶子. (2000). ESP の理論と実践. 三修社.

白畑知彦. 富田祐一. 村野井仁. 若林茂則. (2009). 英語教育用語辞典. 大修館書店.

Tom Hutchinson and Alan Waters.(1993).English for Specific Purposes. Cambridge University Press.

(注 1)

質問項目

The teaching on my course

- 1 - Staff are good at explaining things.
- 2 - Staff have made the subject interesting.
- 3 - Staff are enthusiastic about what they are teaching.
- 4 - The course is intellectually stimulating.

Assessment and feedback

- 5 - The criteria used in marking have been clear in advance.
- 6 - Assessment arrangements and marking have been fair.
- 7 - Feedback on my work has been prompt.
- 8 - I have received detailed comments on my work.
- 9 - Feedback on my work has helped me clarify things I did not understand.

Academic support

- 10 - I have received sufficient advice and support with my studies.
- 11 - I have been able to contact staff when I needed to.
- 12 - Good advice was available when I needed to make study choices.

Organization and management

- 13 - The timetable works efficiently as far as my activities are concerned.
- 14 - Any changes in the course or teaching have been communicated effectively.
- 15 - The course is well organized and is running smoothly.

Learning resources

- 16 - The library resources and services are good enough for my needs.
- 17 - I have been able to access general IT resources when I needed to.
- 18 - I have been able to access specialized equipment, facilities or room when I needed to.

Personal development

- 19 - The course has helped me present myself with confidence.
- 20 - My communication skills have improved.
- 21 - As a result of the course, I feel confident in tackling unfamiliar problems.

Overall satisfaction

- 22 - Overall, I am satisfied with the quality of the course.

(注2) 専門科目カリキュラム表 (2012)

授業科目名		1年次	2年次	
英 文 学 科 専 門 教 育 課 程	学 科 専 門 教 育 科 目	必修科目	発音法 I II リスニング・スキル I II オーラル・イングリッシュ I II 英作文 I II リーディング・スキル I II ボキャブラリー・ビルディング I II 英文法 I II スタディ・スキル I II アセンブリ I	エクステンシブ・リーディング I II スタディ・スキル III IV
		選択科目	コミュニケーション・スキル 国語表現法 海外研修 A I・A II 海外研修 B I・B II 海外事情 通訳法 I 英語技能演習 I II 訳読演習 I II プレゼンテーション・ディスカッション I・II インターンシップ 総合講義ホスピタリティ	英米文化 I II 英米文学 I II ビジネス・イングリッシュ I II リスニング・スキル III IV 英語学 I II 通訳法 II III 英語技能演習 III 日本語教授法 日英言語文化比較 I II 女性と文化 I II 比較文化 I II ホスピタリティと観光
		選択必修科目	イングリッシュ・バイブル I II 情報入門 情報活用	オーラル・イングリッシュ III IV V VI Geography I II History I II Psychology I II Sociology I II Intercultural Communication Life Science I II Anthropology I II World Music I II